

敦煌写本『無量寿経』の系統について

堀 祐 彰

1. はじめに

宋代から元代の漢訳大蔵経について、3つの系統に分類できると言われている。つまり、1つ目は開宝蔵系統で高麗大蔵経（初雕本）・金版大蔵経が属する「第一類蔵経」、2つ目は契丹蔵系統で房山石経が属する「第二類蔵経」、3つ目は江南諸蔵系統で東禪寺版・開元寺版・思溪版・磧砂版・普寧寺版が属する「第三類蔵経」である。『無量寿経』は版本大蔵経以外にも、敦煌写本・トルファン写本、そして日本の写本・刊本などが存在する。小論では、それら『無量寿経』の諸本のなか、特に敦煌写本 18 本に焦点をあてることとする。

敦煌写本は契丹蔵系統である房山石経にもっとも近いと言われる。また一方、西域からは、開宝蔵系統や契丹蔵系統や江南諸蔵系統の写本の断片が出土している、とも言われる。そこで 18 本の敦煌写本と、房山石経・高麗版・金版・東禪寺版・開元寺版・思溪版の諸本の文字等の比較を通して、それら敦煌写本『無量寿経』の系統について、開宝蔵系統（高麗版¹⁾、金版の系統）か、契丹蔵系統（房山石経の系統）か、江南諸蔵に近い系統かを考察していきたい。

2. 敦煌写本について

- ① スタイン本 4 点。『敦煌宝蔵』9 所収。（以下、S1 本・S2 本・S3 本・S4 本とする）
- ② 中国国家図書館所蔵本 6 点。『敦煌大蔵経』19 所収。『敦煌遺書』第 105 冊所収。（以下、中 1 本・中 2 本・中 3 本・中 4 本・中 5 本・中 6 本とする）
- ③ 上海図書館所蔵本 1 点。『敦煌吐魯番文献』3 所収。（以下、上海図本とする）
- ④ 北京大学図書館所蔵本 1 点。『敦煌文献』1 所収。（以下、北京大本とする）
- ⑤ ペリオ本 1 点。『敦煌吐魯番文献集成 法蔵敦煌西域文献』31 所収。（以下、ペリオ本とする）
- ⑥ ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵本 3 点。

(54) 敦煌写本『無量寿経』の系統について (堀)

(以下, R1 本・R2 本・R3 本とする)

⑦ 龍谷大学図書館所蔵本 1 点。(以下, 龍大本とする)

⑧ 大谷大学図書館所蔵本 1 点. 野上俊静氏編『大谷大学所蔵 敦煌古写経』所収。(以下, 大谷大本とする)

⑨ 『敦煌秘笈』所収本 1 点。(以下, 秘笈本とする)

3. 大蔵経系等諸本 (石経系も含む) について

① 房山石経 (遼金刻経), 『房山石経』(中国仏教協会) 所収.

② 高麗大蔵経 (再雕本), 韓国海印寺蔵原本『高麗大蔵経』11 (線装書局影印, 485~504 頁) 所収。(以下, 高麗版とする)

③ 金版大蔵経 (大宝集寺本), 『中華大蔵経』(第 9 冊 28 番, 589~598 頁) 所収. 上巻のみ。(以下, 金版とする)

④ 福州版

i. 東禅寺版, 高野山金剛峯寺所蔵本.²⁾

ii. 開元寺版, 宮内庁書陵部所蔵本.

⑤ 思溪版, 増上寺所蔵本.

4. 敦煌写本の系統分け

4.1. 対照表について

18 本の敦煌写本の各本と房山石経を含む大蔵経系諸本 (対照する諸本) との文字一字一句の比較を行い, 以下の対照表を作成した. その対照表では, 敦煌写本の各本と対照する諸本である房山石経を含む大蔵経系諸本との文字の相違数をあげ, 敦煌写本の各本における全体の文字数で割り, 相違率を示した.

尚, 対照表のなか, 敦煌写本の各本の右に示した頁数行数は, 現在の『無量寿経』の翻刻の最新である『浄土真宗聖典全書』³⁾の頁数行数である. その右には敦煌写本の各本の全体の文字数を示している. 房山の文字数とあるのは, 房山石経は一部文字が剝落しているのでその剝落している文字の数を引いた数であり, 房山石経と対照しその相違率を出すのにはこの数を用いた.

敦煌写本『無量寿経』の系統について（堀）

(55)

	『浄土真宗聖 典全書』 頁数・行数	全体の 文字数	房山の 文字数	対照する諸本					
				房山石 経	高麗版	金版	東禅寺 版	開元寺 版	思溪版
S1 本	48 頁 9 行～ 70 頁 9 行	7405	6301	90 1.428%	109 1.471%	— —	115 1.553%	114 1.539%	106 1.431%
S2 本	49 頁 7 行～ 70 頁 卷下終	7122	6040	81 1.341%	104 1.460%	— —	120 1.684%	121 1.698%	115 1.614%
S3 本	44 頁 2 行～ 70 頁 卷下終	8790	7493	119 1.588%	140 1.592%	— —	113 1.285%	118 1.342%	108 1.228%
S4 本	24 頁 4 行～ 29 頁 1 行	1318	1051	16 1.522%	33 2.503%	35 2.655%	20 1.517%	19 1.441%	18 1.365%
中 1 本	17 頁 6 行～ 32 頁 2 行	4289	3168	79 2.051%	88 2.051%	74 1.725%	90 2.098%	88 2.051%	85 1.981%
中 2 本	21 頁 8 行～ 42 頁 卷上終	6291	5055	94 1.859%	168 2.670%	151 2.400%	136 2.161%	140 2.225%	125 1.986%
中 3 本	28 頁 13 行～ 42 頁 卷上終	4260	3485	85 2.439%	112 2.629%	98 2.300%	91 2.136%	98 2.300%	98 2.300%
中 4 本	23 頁 5 行～ 42 頁 卷上終	5816	4707	130 2.761%	112 1.925%	107 1.839%	145 2.493%	149 2.561%	136 2.338%
中 5 本	62 頁 9 行～ 70 頁 卷下終	2647	2067	27 1.306%	36 1.360%	— —	35 1.322%	35 1.322%	34 1.284%
中 6 本	40 頁 12 行～ 41 頁 卷上終	387	368	9 2.445%	3 0.775%	2 0.516%	5 1.291%	6 1.550%	7 1.808%
上海図 本	53 頁 14 行～ 70 頁 卷下終	5558	4650	87 1.870%	104 1.871%	— —	82 1.475%	84 1.511%	77 1.385%
北京大 本	36 頁 1 行～ 42 頁 卷上終	2032	1726	50 2.896%	58 2.854%	47 2.312%	45 2.214%	47 2.312%	47 2.312%
ペリオ 本	57 頁 7 行～ 65 頁 7 行	2725	2308	36 1.559%	56 2.055%	— —	36 1.321%	37 1.357%	35 1.284%
R1 本	66 頁 6 行～ 67 頁 3 行	225	213	2 0.938%	2 0.888%	— —	4 1.777%	4 1.777%	3 1.333%
R3 本	32 頁 11 行～ 33 頁 4 行	162	140	7 5.000%	6 3.703%	5 3.086%	9 5.555%	7 4.320%	6 3.703%
龍大本	29 頁 7 行～ 42 頁 卷上終	4115	3370	85 2.522%	136 3.304%	122 2.964%	108 2.624%	114 2.770%	112 2.721%
大谷大 本	22 頁 10 行～ 42 頁 卷上終	6029	4869	113 2.320%	136 2.256%	129 2.139%	152 2.521%	156 2.587%	149 2.471%
秘笈本	26 頁 13 行～ 41 頁 10 行	9506	7830	110 1.404%	153 1.609%	143 1.504%	119 1.251%	123 1.293%	131 1.378%

(56)

敦煌写本『無量寿経』の系統について（堀）

4.2. 諸本における字句の相違からの検証

4.2.1. 「人天」・「天人」

以前、『無量寿経』の四十八願文等にみられる「人天」について⁴⁾、高麗版と金版ではそのすべてが「人天」で、房山石経と江南諸蔵ではそのすべてが「天人」となっていることから、房山石経・大蔵経系諸本・日本の写本刊本の系統をみていくうえで決定的な相違として挙げた⁵⁾。今回も同様に敦煌写本について検証したが、該当箇所のある敦煌写本のすべて（S4本・中1本・中2本・中3本・中4本・大谷大本・秘笈本）は「天人」であることが判明した。その他の敦煌写本については、該当箇所がないので不明であり、房山石経・大蔵経系諸本・日本の写本刊本の系統分けのように、「天人」か「人天」かで系統分けをすることは出来なかった。ここで注意すべきことは、実際に敦煌写本の文字を諸本の文字と対照させてみると、「人天」の部分に関しては、開宝蔵以外の系統のテキストの影響を受けているが、それ以外の部分は開宝蔵系統のテキストの影響を受けているものもある。そのことは、諸本との相違率を示す対照表を見ても明らかである。

4.2.2. 「馬瑙」「虎魄」「車渠」「頗梨」「菩薩聲聞大衆」

『無量寿経』全体で「馬瑙」は14箇所、「虎魄」は4箇所、「車渠」は13箇所、「頗梨」は2箇所ある。敦煌写本全体をみると、金版と同じ字形の「馬瑙」⁶⁾・「虎珀」・「車渠」・「頗梨」を使用している敦煌写本が大部分を占めている⁷⁾。全般的に開宝蔵系統の影響を受けているように見受けられるが、この場合も、金版と同じ字形の用語を用いている写本のなかには開宝蔵系統以外の影響を受けているものも含まれている。一方、「菩薩聲聞大衆」の語は、巻下に5箇所あるが、敦煌写本の大部分は、房山石経や江南諸蔵と同じく「菩薩聲聞之衆」という語になっている。この場合も、該当箇所のある写本のなかには開宝蔵系統の影響を受けているものも含まれている。

4.2.3. 「勤」・「懃」

『無量寿経』の中に「勤」の字は22箇所ある⁸⁾。「勤」ではなく「懃」の字が用いられている『無量寿経』の諸本としては、日本の写本刊本が挙げられるが、中国の大蔵経のなかでは、東禅寺版・開元寺版・思溪版においてそれぞれ1箇所のみ「懃」の字の使用がみられるにすぎない。敦煌写本において、「勤」ではなく、「懃」を用いているものをみていくと、S3本（18/19）⁹⁾・上海図本（11/13）・ペリオ本（7/7）・中1本（1/1）・中2本（2/2）・中3本（1/1）・中4本（1/1）・中5本（2/2）・龍大本（1/1）・谷大本（2/2）・秘笈本（1/1）が挙げられる。ここでは数の多いS3

本・上海図本・ペリオ本に注目すると、3本ともに、相違率の一番低いのは江南諸蔵で、房山石経、高麗版の順番で高くなっている。つまり、S3本・上海図本・ペリオ本は同系統と言えるのであるが、ペリオ本については房山石経の相違率がわずかに低いこともあって、契丹蔵系統の影響を他の2本よりも受けていると考え、系統分けに反映させた。

4.3. 首題と尾題からの検証

敦煌写本の経題をみていくと、巻上の尾題（中2本・龍大本・大谷大本）と巻下の尾題（中5本・S2本・S3本）しかない。他の写本にはその該当箇所がないのである。巻上の尾題には、中2本・龍大本ともに「無量寿経巻上」とあり、高麗版・金版・東禅寺版・開元寺版・思溪版と同じである。つまり、中2本・龍大本は開宝蔵系統、江南諸蔵系統のどちらか一方、あるいは両系統の影響を受けていると考えられる。大谷大本では「佛説無量寿経上」とあるが、単に「巻」を脱字したと考えると、「佛説無量寿経巻上」の房山石経と同じである。大谷大本は契丹蔵系統の影響を受けていると考えられる。また、巻下の尾題では、中5本・S2本・S3本が「無量寿経巻下」とあり、高麗版・開元寺版・思溪版と同じである¹⁰⁾。ここにおいても中5本・S2本・S3本は開宝蔵系統、江南諸蔵系統のどちらか一方、あるいは両系統の影響を受けていると考えられる。

4.4. 系統分け

以上の検証結果を踏まえつつ、また4.1.の対照表において示した相違率により、以下のように系統分けをした。敦煌写本の各本において、まず最初に主系統を挙げて、複数の系統の影響を受けていると思われるものは、その主系統の後の「+」に続けてその系統を表記した。また、系統分けをしていくなかには大変複雑なものもあり、それについては三系統のすべてを挙げた¹¹⁾。

〈S 1 本〉契丹蔵 + 江南諸蔵・開宝蔵	〈S 2 本〉契丹蔵 + 開宝蔵
〈S 3 本〉江南諸蔵	〈S 4 本〉江南諸蔵 + 契丹蔵
〈中 1 本〉開宝蔵 + 江南諸蔵・契丹蔵	〈中 2 本〉契丹蔵 + 江南諸蔵
〈中 3 本〉江南諸蔵 + 契丹蔵・開宝蔵	〈中 4 本〉開宝蔵
〈中 5 本〉江南諸蔵 + 契丹蔵・開宝蔵	〈中 6 本〉開宝蔵
〈上海図本〉江南諸蔵	〈北京大本〉江南諸蔵 + 開宝蔵
〈ペリオ本〉江南諸蔵 + 契丹蔵	〈R 1 本〉開宝蔵 + 契丹蔵
〈R 3 本〉開宝蔵	〈龍大本〉契丹蔵 + 江南諸蔵
〈大谷大本〉開宝蔵 + 契丹蔵	〈秘笈本〉江南諸蔵 + 契丹蔵・開宝蔵

(58)

敦煌写本『無量寿経』の系統について（堀）

5. 小結

以上、敦煌写本『無量寿経』の18本について、大体の系統分けを試みた。検証結果からも明らかなように、敦煌写本『無量寿経』については、従来いわれているように契丹蔵系統である房山石経に近いというような一つの系統にまとまったものではなく、複数の系統の影響を受けていることを窺うことができた。また、上記の系統分けにおいて、一つの系統だけで示した敦煌写本であっても、他の系統の影響を全く受けていないとは言えることはできないように思われる。つまり、上記の系統分けは、完全にその系統のテキストだけを用いて書写したものであることを確定したものではなく、敦煌写本各々の傾向としてどの系統に近いのかということを示したものである。

-
- 1) 『無量寿経』の高麗版は再雕本であり、開宝蔵の覆刻といわれる初雕本ではないことに注意する必要がある。
 - 2) 今回、東禅寺版を入手することができたことについて、高野山金剛峯寺ならびに高野山霊宝館の関係者には心から感謝します。
 - 3) 浄土真宗本願寺派総合研究所編纂『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）、浄土真宗本願寺派発行、2013年。
 - 4) 底本が浄土真宗本願寺派蔵版本である『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）において、『無量寿経』のなかに「人天」は19箇所ある。
 - 5) 拙稿「『大無量寿経』の諸本について」（『浄土真宗総合研究』8、2014年）。
 - 6) 敦煌写本のほとんどにおいて、「馬瑙」の「瑙」の字体が「琰」になっている。一方、金版では「瑙」の字体は「瑙」であり両字は異なっているように見えるが、両字ともに「瑙」の異体字と判断した（漢字字体規範データベース編纂委員会「漢字字体規範データベース（HNG）」参照）。
 - 7) 高麗蔵（再雕本）では、「瑪瑙」「琥珀」に関して金版と違う字体のものも混在している。
 - 8) 『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）所収の『仏説無量寿経』（底本は浄土真宗本願寺派蔵版本である）に翻刻されている「勤」の字の数である。
 - 9) 括弧（ ）内の数字はS3本の該当箇所19のうち、18箇所に「勤」の字が書かれていることを示す。以下、同。
 - 10) 東禅寺版の巻下の尾題は欠落している。
 - 11) 実際に三系統からそれぞれ影響を受けたものも考えられる。

〈キーワード〉 敦煌写本、『無量寿経』

（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）